

- 16日 第一部 JCDNの活動内容紹介  
第二部 全国のダンスの状況(制作とアーティストの立場から)  
第三部 全国のダンスの環境づくりに向けての提言
- 17日 JCDN 会員ミーティング

### 第二部 全国のダンスの状況 <東京以外の都市の発言>

★ 各発言者の活動紹介は、省略してあります。問題提示を中心にまとめてあります

#### 制作者・スペースからの発言

- 制作者、観客が育たないのが現状。活動が広がっていかない。(複数の地域)
- ホール・団体などが舞踏・コンテンポラリーダンスの公演を主催しないので、個人で制作を始めた。最近では増えてきたが、マネジメントや制作の意識をどう高めていくか問題がある。(新潟)
- 東京近郊であるため制作者が地元を離れることが多いので、制作者が育たない。(前橋)
- ダンススタジオがダンス状況のベースになっていて、コンテンポラリーなど、知名度の低いものに関して、観客が増えない。(新潟)
- アートスペースがあるということもあり、美術・演劇・ダンス間の交流ができてきた。(金沢)
- コンテンポラリーに向けたスペースが少なくアーティストが利用しにくい現状がある。(名古屋)
- 劇場、稽古場の不足が考えられる。(名古屋)
- プログラムの実施にあたってボランティアスタッフや協力組織などをどのように確保していけるかを検討している。(名古屋)
- レジデンシープログラムをワークショップ(以下 WS)を中心に行ってきたが、地域の認知度が低く、ダンスプロデュースの専門知識がないという問題がある。(秋吉台)
- 遠隔地ということで交通費の費用がかさみ、公演費が高くなる。キャパに応じた公演を行うため集客が困難であり、希望する公演回数ができない。(高知)

#### 振付家・ダンサーからの発言

- ジャズ・モダン・クラシックというジャンルに分割され、ジャンルを超えた活動がしにくい。
- スタジオで教えることが中心で作品をつくるができない。(仙台)
- 自分で活動をしたいという人は東京に行ってしまう、活動し易い現状とはいえにくい。コンセプトを持ったスペースが少ない。(名古屋)
- 積極的にコンセプトを持って活動しているスペースの影響で、ダンス未経験者のための WS を経験したことなどから、自分の活動に広がりが出てきた。(大阪)
- バレエをやってきた人たちが作品をつくることに興味を持ち始めた人対象に、WSを行っている。(大阪)
- いろいろな意味で、関西では活動が広がりつつあるが自主公演を行うことを考えると厳しい現状である。(京都)
- 関西はスペース、拠点が多くあり活動が広がりつつあると感じるが、観客層が薄いという現状はある。ある年齢を超えても活動を続けられる状況をつくっていきたい。(京都)

### 第3部 全国のダンス環境創りに向けての提言

#### 文化財団関係者

- 制作者はこの10年で、大きく成長を遂げたと感じられる。
- しかし、一番の問題として、アーティストが問題であると感じられる。アーティストとは、自分の考えていることや発想、コンセプトをどれだけインパクトを持って舞台上で発表しているか、新しい発見を鑑賞者に与えているか。それができなければ、社会に対して、アーティストは役をなさない。その強さをアーティストが持っているのかと疑問がある。もっと危

機感をもたなければならず、アーティストは、もっと自分を鍛えなければならないのではないか。

#### 企業メセナの立場から

- これまで、細々とはあるが、メセナ活動として、支援してきたことの甲斐があり、ようやく、新たな芽が出てきたと言える。
- 全国地域の問題として先ほど話題になっていたような、ジャンルを越えられないとか、コンテンポラリーであるということにとらわれるという考え方をやめるべきである。
- 現在になにかを創作しようという場合すべてがコンテンポラリーと言えるのであって、垣根を取り払うことがコンテンポラリーという意味であろうと考える。
- スタジオで行われるレッスンと、ワークショップとはかなり共通点が見られる。つまり、お稽古事を行っているということ。それは、あらかじめ決められた目標地点に向かって、少しずつスキルアップしてやっているということであって、それをワークショップと題して活動している。そういうことは早くやめた方がいい。
- ダンスという表現がなぜ面白いかと言うと、何が飛び出すかわからない、今ある考えと違うものが生まれるところにダンスのおもしろさがあるのであって、あらかじめ決められたものではなく、スタジオ型のワークショップは意味が感じられない。
- 多くのアーティストが、次の公演がいつあるのかわからないというのが現状。
- 海外で公演して、評価されることも大事であるが、日本の中において、評価される環境を整備することに重点をおきたい。

#### 地域芸術活動者の立場から

- 観客集客に何がもっとも重要視されるかと言うと、チケット代金の料金であるといえる。このチケット料金の設定というもっともネックになることを、どのように企業側が活動に理解を示していけるかが課題。
- ウェブサイトは、いまだ中高年など利用していないのが現状。これまでの観客層以外の人をどのように、情報を行き渡らせることができるかを考えていく必要があるだろう。

### ディスカッション内容

#### アーティストの社会へのアプローチ・アウトリーチ活動に関して

- アーティストが社会に対してどのような活動ができるか。海外の例・学校への派遣などをかんがみて、日本でもアウトリーチ活動などを積極的に行う必要がある。
- アウトリーチや社会に視野を広げた活動に興味を持っているアーティストが少ない、また、実際にできるアーティストが少ないのが現状。
- アーティストの教育研修や評価基準を設定すべきである。
- 社会のニーズはあり、実際に活動しているアーティストもいるが、そのような活動をしているアーティストに社会保障というものが必要ではないか。
- 社会にアウトリーチの活動を受け入れやすくするためには、自分たちのほうからの歩み寄りが必要ではないか。
- 現在のワークショップは、啓蒙的すぎるのではないか。観客が主体になり振付を提案してもらおうということも可能ではないか。自分たちだけが優れたものを持っているという感覚ではなく双方向性が必要

#### アーティスト同士のコミュニケーション

- ダンサー同士の交流が非常に少ない。そこで、ダンサーが主体的になって活動していけるような場をつくりたいと思い、ダンサーに声をかけインプロジャムを行う計画をたてた。これは稽古であるという位置付け。
- 数年前から上記のような活動をしているが、参加者が増えないなどの問題がある。お互いの情報交換をする必要がある。
- 現実的に出会う場所がない。ラフにもものをつくる場がない。
- 場所よりプライドの問題。スタジオの縛りがあるということも問題だが勇気が必要だろう。

### スタジオの枠を超えられないという問題

- スタジオで教えることで生活しているのがダンサーの現状。そこで作品をつくるとなると生徒がダンサーとして出演する。その場合、先生と生徒という枠の中でやらざる得ないのが現状。問題はあると思うがどうすればいいか解決策がない。
- こういった家元制度は根が深いので、現状を把握し解決策を提言しなければいけない。
- 地方では、スタジオのみが主体になって活動をしているが、最近の東京・関西では、スタジオ以外のスペースが活動の拠点になることにより、問題を解決しつつあるように思う。
- JCDN が定義づけるコンテンポラリーダンスとは、ジャンルを示すものではなく、現代的な今日的な、という意味でありスタイルによって分けるものではない。
- ダンスの社会での浸透性を考えるとき、カンパニーごと、ジャンルごとの争い、制作者、業界内の軋轢などを問題としエネルギーを費やすのではなく、社会全体としてみた場合、ダンスをキーワードに対社会にどう発信していけるかを、共通認識として活動していくべきだろう。

### 17日 JCDN 会員のみのもーティング

#### <全国地域からの問題点とし発言があった課題に対して各発言者からの意見交換・提言>

#### スペースの活動から、振付家が増えた過程

- 最初、コンテンポラリーダンスの集客は困難であったが、動員を増やすためにジャズやモダンダンスの観客を持っている制作者と共同作業を行うようになり企画をたちあげた。その中からスタジオで教えている「先生」が、作品を発表したいと思っているが場がない、ということでサポートを始め、そこからその「生徒」であったダンサーが作品を発表するようになっていった。

#### ボランティアスタッフに関して

- 地方でスタッフ不在という意見がでたが、ボランティアスタッフは自然発生的に集まってくる。
- 手伝っているという意識でなく一緒に企画を行っている

#### ダンス批評・ダンス評論家の不在

- 関西において、ダンス批評家がいらない。固い文章が目立つ。そこで観客のアンケートをボランティアスタッフがまとめ、ニュースレターを作成していくと、アンケートの記入にも変化がみられるようになる。
- ボランティアスタッフによるアーティストへのインタビューを通じてアーティストと観客の両方の育成になっている
- 批評ができる若手が育っていない。東京だけでなく地元の大学生で批評家を目指している学生にダンスの現場を見せる。ダンスと出会う機会がないので若手が出てこない。オーガナイザーはそのあたりに取り組む必要がある。
- 批評家不在というのは全国の問題。現在の日本で、大手新聞などでは若手をとりあげる気配はまったくないだろうし、書く媒体がないのが現実。また批評家が好きなことを書くのではなく、編集者の意図するものを扱わなくてはならないという枠組みの中では自由な批評は存在しない。
- ダンス主催者は安易に招待状を出しすぎているのではないか。
- 現実的に自由な評論の場はネット上にしかない。
- ダンスの言語化をきちんとしていかないと、それが残っていかないし観なかった人に対して何も伝えられない。
- そのダンスの価値というものを観客・批評家・行政・メディアという相手先にターゲット絞って届ける必要がある。

#### 各地域でのワークショップ・公演の活性化について

- ダンサーとして自分の活動がどういうものなのか、伝えにくいということがある。地方で公演やワークショップを行う場合、どういうアーティストがどういうことをやっているのか情報がないのが現状だろう。JCDN がワークショップやソロ公演などを行っているアーティストのストックのようなものをつくり、その情報をもとに地方の人は選ぶようにすればいいのではないか。
- JCDN としてはそういう意味でも今年ダンスファイルを作成した。現在一地方で 1 年に 1 回 WS を行うとして 10 年で 10 人しかまわれないことになる。地元のアーティストを育成していくためには継続した形で行うための方法を探っている。本日来られているホール関係者、制作者とともに、データバンク・ブッキングシステムを作成してみたいと思っている。

#### 各地の拠点・スペースの役割・今後の必要なこと

- 東京や関西のようにコンテンポラリーダンスがない、という現状の地域では、いくら公演をやらうとしても、やりたいと思っているアーティストがいるかどうか不安になる。
- そういう意味でアーティストも地方からでて東京や関西に出てしまう。そういう状況になる前に、各地にあったプログラムを実施し地元のアーティストと共に活動していけるような道をさぐる必要がある
- 小スペース間のネットワークというものはできつつあるが、パークタワーほどの大きさのネットワークというものが無い。今後はスペースの規模が同じくらいのネットワークが必要ではないか
- 東京近郊などでは、創作する場としてスペースが豊富にある。そういうところから東京以外の地域でアーティストが育っていく利点を活用すべきだと思う。
- 地方都市ではダンスの観客が入らないと意味がない」と終わってしまうことが多いが、担当者の熱意やアーティストが理解を得られるようなコミュニケーションをとることが必要である。
- 地方で同じやり方をしても観客がはいらないのは当然。理解されるような説明やパブリシティの工夫が必要である
- キャリアの浅いアーティストとしては、自分の資料、写真、ビデオを誰に撮ってもらえばいいのかわからない、予算もない、そういう場合はどうすればいいのか。
- 上記に関しては、アーティストとしてまず自分で探す、またどういうレベルのものが必要か目標を決めるなど、最低限、自分のやるべきことがある
- しかし劇場やオーガナイザーとして、あるいは JCDN としては、低料金で頼める撮影家を紹介していくことも必要だろう。

#### 今後の課題

- まずこういった集まりにはアーティストがこななければならない。そうでなければ何も変わっていかないだろう。
- 年に数回こういったミーティングを持ちたいが、資金面で難しいこともある。JCDN 会員が各地域でおのおの何らかの企画を立ち上げていき、積極的に活動をしていくことを望んでいる。それに対するサポートはできるだけ行っていきたい。
- まずはアーティスト・制作者・ホール関係者などがコミュニケーションをとっていくことが必要ではないか。